



美馬市立図書館

図書館だより

発行：美馬市立図書館

(指定管理者：(株)図書館流通センター)

〒779-3602

美馬市脇町大字猪尻字西分 116 番地 1

TEL 0883-53-9666



第 172 回 芥川賞・直木賞 受賞作品



『DTOPIA (デートピア)』

安堂 ホセ/著 河出書房新社 (Fア)



『ゲーテはすべてを言った』

鈴木 結生/著 朝日新聞出版 (Fス)

【著者紹介】

東京都生まれ。『ジャクソンひとり』で文藝賞を受賞しデビュー。ほかの著書に『迷彩色の男』がある。

【内容紹介】

舞台は南太平洋の楽園。ひとりの女を巡る、世界各国 10 人の男たちの争奪戦。恋愛リアリティショー「D'TOPIA」の視聴者たちは、やがて「自分だけの D'TOPIA」を編集しはじめ-

【著者紹介】

福岡県生まれ。2024 年『人にはどれほどの本がいるか』で第 10 回林芙美子文学賞佳作を受賞。

【内容紹介】

高名なゲーテ学者・博覧強記はある日、彼の知らないゲーテの名言と出会う。ティー・バッグのタグに書かれたその言葉を求めて膨大な原典を読み漁り、長年の研学生活の記憶を辿るが…。



『藍を継ぐ海』

伊与原 新/著 新潮社 (Fイ)

短編の一つで表題作の「藍を継ぐ海」は徳島が舞台

話題の本にはご予約をおすすめします。「予約・リクエスト申込書」やインターネット予約をご利用ください。



【著者紹介】

大阪府生まれ。『お台場アイランドベイビー』で横溝正史ミステリ大賞、『月まで三キロ』で新田次郎文学賞、静岡書店大賞、未来屋小説大賞を受賞。ほかの著書に『オオルリ流星群』など。

【内容紹介】

ウミガメの卵を孵化させ、ひとりで育てようとする中学生。奈良の山奥でニホンオオカミに出会う Web デザイナー…。科学だけが気づかせてくれる大切な未来を描く、5 つの物語。

【芥川賞候補作品】

『ダンス』 竹中 優子/著、新潮社

『字滑り』 永方 佑樹/著、文學界 2024 年 10 月号

『二十四五』 乗代 雄介/著、講談社

【直木賞候補作品】

『よむよむかたる』 朝倉 かすみ/著、文藝春秋

『飽くなき地景』 荻堂 顕/著、KADOKAWA

『秘色の契り 阿波宝暦明和の変 顕末譚』

木下 昌輝/著、徳間書店

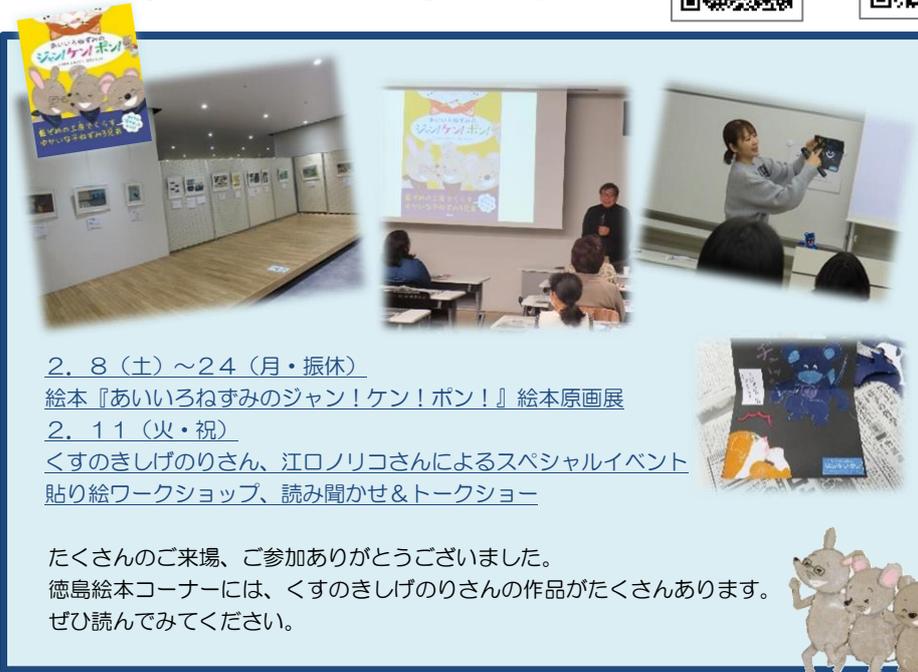
『虚の伽藍』 月村 了衛/著、新潮社

これも徳島!
徳島藩
蜂須賀家の話

イベント報告



美馬市立図書館の最新情報は
公式 SNS をご覧ください♪



2. 8 (土) ~ 24 (月・振休)

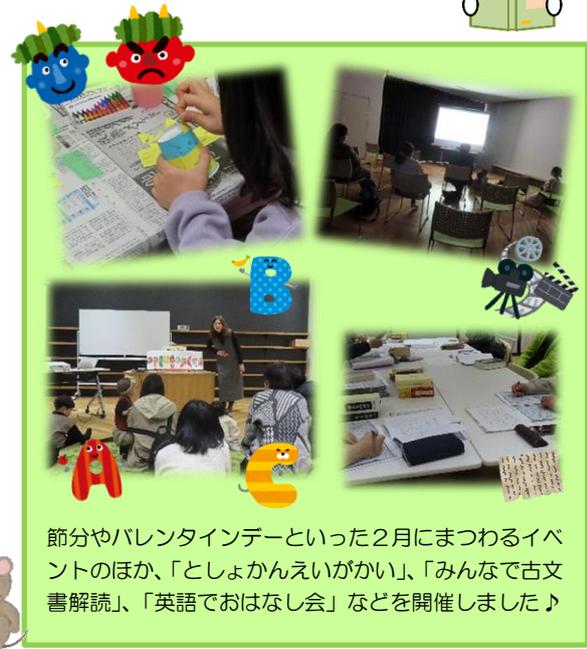
絵本『あいうねずみのジャン!ケン!ポン!』絵本原画展

2. 11 (火・祝)

くすのきしげのりさん、江ノノリコさんによるスペシャルイベント
貼り絵ワークショップ、読み聞かせ&トークショー

たくさんのご来場、ご参加ありがとうございました。

徳島絵本コーナーには、くすのきしげのりさんの作品がたくさんあります。
ぜひ読んでみてください。



節分やバレンタインデーといった2月にまつわるイベントのほか、「としょかんえいがかい」、「みんなで古文書解読」、「英語でおはなし会」などを開催しました♪



私が紹介するのは、サトシン作『わたしはあかねこ』とブレイディみかこ著『ぼくはイエローでホワイトで、ちょっとブルー』の2冊です。どちらの本も、「自分を大切にすること」「違いを認めること」という共通したテーマを持っています。読んだ人が、それぞれの立場で何かを感じ、考えるきっかけになれば嬉しいです。

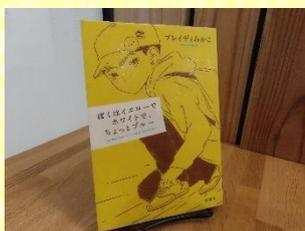
紹介者：大谷 茜さん（美馬市在住）



『わたしはあかねこ』
(サトシン/作、西村 敏雄/絵、文溪堂)

『わたしはあかねこ』は、個性や自己肯定感の大切さをやさしく伝えてくれる絵本です。私は保護者の膝の上にいる赤ちゃんから、思春期の中学生まで、幅広い年齢の子どもたちに読み聞かせをしています。その中で感じるのは「自分を大切にすること」がどんな世代にとっても重要だということ。自己肯定感が低いと、人間関係や自己表現にも影響を及ぼします。だからこそ、この絵本を通して「ありのままの自分を大切にしてほしい」というメッセージを届けたいと思いました。

実際にこの絵本を読んだとき、私は「自分自身を好きで、大切にできていない」と気づきました。それまで無意識に「私なんて…」と自分を下げるクセがあったけれど、あかねこの言葉に出会って「私じゃなきゃね」と思えるようになりました。気持ちが変化すると、自分を大切にすることの大事さを誰かに伝えたくなるんですね 🌈



『ぼくはイエローでホワイトで、ちょっとブルー』(ブレイディみかこ/著、新潮社)

『ぼくはイエローでホワイトで、ときどきブルー』は、思春期の子どもたちが直面する社会の現実を描いたノンフィクション。貧富の差や差別といったテーマを通して、「違い」とどう向き合い、どう考えていくかを問う一冊です。親の視点、子どもの視点、それぞれが交差する物語の中で、見守ることの大切さにも気づかされます。子どもたちには「社会を知るきっかけ」として、そして大人には「子どもたちの目線を知る手がかり」として、ぜひ読んでほしい本です。